あさかぜ

高知学芸高等学校同窓会関東支部

機関誌28号
2015．9

〒263-0005
千葉県千葉市稲毛区
長沼町263-16-3　石川明男
TEL 043(257)2614
FAX 043(257)2614

「同窓会へ行こう！」

30期　前田　泰志

今年は30期が総会の幹事を致します。よろしくお願い致します。ご多分に漏れずこの会でも後継者不足が深刻で、幹事が1学年ずつ繰り下がる方式での開催が続くのか、ここ5～6年危ぶまれてきました。しかし先輩方のご尽力で飛び級になることなく、満を持してこの度順当に30期の登場です。

総会に向けた準備のため、昨年12月に初めて同期で集まりました。そこでの話題はやはり若手の参加者不足でした。自分達より若い世代がほとんど参加しない現状は問題で、若い人が来たいような会にしないといかんよね、というのが共通の認識でした。若い人が来ないのはなぜでしょう？理由は色々考えられます。「そんな会あること自体知らん」、「そんなのに行く暇も金もない」、「知らん人ばっかりやし」など。

この「あさかぜ」が届いてない人もいるでしょう。届いていても1年も前の総会の様子が載って、1年に1回しか案内が来ない。ここで参加を呼びかけてみても、毎回来る人は来るけど来たことない人は何かきっかけでもないと来にくいし…。1回来ても、1年に1回しか会わないのでは顔も覚えてもらえないし、ではやっぱり続かないのかも。

今回はそんな同窓会の問題点をみんなで洗い出し、改善を実行しようということで意見がまとまりました。もう20年以上前に泊まり込みで如月祭の準備をした頃を思い出しながら、時には飲みながら、時には酒抜きでまじめに雁首並べて意見を出し合い議論をしました。

そこでまず考えたのは、今年高校を卒業して関東に出てきた卒業生の歓迎会を4月に開催して、この会を認知してもらってはということ。時間がない中、橋本校長先生に学生さんへの告知にご尽力いただきました。その甲斐あって、新卒生9名を含む33名が集まり盛況でした。それに引き続き、50期以下の若い人たちのバーベキュー大会のアイデアを提供し、若手の独自運営で開催され40人以上集まったそうです。どこの会合でも高齢化し、新入会員が少ないとの嘆きを聞くので、時代の流れとして仕方ないのでないかと半分あきらめていましたが、世の中存外捨てたものではありません。

他方で、更新頻度の高くなかったホームページのリニューアルもしました。「あさかぜ」は軽量化する代りネットを利用してタイムリーな情報提供をすることか、相互交流のため名簿を有効活用すること、総会幹事のルーティーンワークはリスト化して次期以降の幹事の省力化なども考えています。

そして最大イベントである10月の総会、懇親会は若手にも来てもらうこと、今後も続けて来てもらうことを目指して企画を練りつつあります。どうぞご期待下さい。我々としては今年の幹事をこなし、来年31期に引き継げば最低限お役目は果たせます。しかし、同窓会がいずれ長い目で見れば相互にお役に立つ会になるように変革を実行しつつあります。

誤解のないよう申し上げますが、もちろん若手でない方を排斥するつもりは毛頭ありません。老若男女、一族郎党、お誘い合わせの上、ぜひご来場下さい。

初回打ち合わせに集まった仲間(30期)たち

第27回（2014年）関東支部総会 開催

2014年10月25日(土)、高知学芸高校同窓会関東支部の第27回総会は神田神保町の「学士会館」で開催された。

高知の同窓会本部からは、西川博行同窓会長(6期)、福田恵美副会長(6期)、宮地明副会長(14期)、学校からは、橋本和紀校長(20期)、森下表先生(17期・地歴公民・同窓会副会長兼任)、蒲原宜彦先生(25期・英語・同窓会会計兼任)、安井勝宏先生(29期・美術)の先生方の7人にご出席戴きました。

総会は幹事の西雅史氏(29期)の司会でスタート。石川明男支部長(6期)からの挨拶と活動報告が行われ「関東支部の活動としては機関誌あさかぜの発行がメインですが、クラブ活動的な動きとしてトレッキングなども行っています。ゴルフやテニスや歴史探訪などの文化活動も行ってはどうかとのお話もあり、日頃の活動も増やしていきたいと思っています」と話された。

石川支部長

第27回総会風景

その後、議長の岡本洋氏(8期)により議事が進行された。まず、会計担当の住友謙一氏(30期)から、昨年の第26回総会での2013年度の会計報告で年会費の振込みの7万3380円が未計上であったため、2014年度の仮払金回収として計上するとの報告があった。また、2014年度は、収入の部は225万1095円、支出の部は141万8578円で残金は83万2517円。「今期の年会費収入は約51万円でしたが、昨年の65万円から約15万円も減っています。同期の方などに年会費の振込みを勧めて頂きたい」とのお願いもあった。引続き会計監査の戸田典尚氏(17期)から監査報告があり、原案通り承認された。(会計報告は14ページを参照下さい)

今期は役員改選期ではないが、副支部長の補充については昨年の総会で「来年(2014年)の総会で任命する」こととなっていた。新しい副支部長候補として、18期の中城千秋氏が推薦され承認された。中城新副支部長は「微力ではございますが、学芸を卒業して良かった、同窓会があって良かったなぁ、と思って頂けるようにしていきたいと思います」と挨拶された。

その後、来賓の高知の同窓会本部の西川同窓会長のご挨拶の後、橋本校長からは「本校の卒業生は現在1万9638人、もうすぐ2万人になります。各地区の同窓会支部やクラブ活動のOB会、同期の同窓会など学芸の卒業生の活動はどんどん広がっています。関係の方々のご努力に感謝と敬意を表したいと思っています。卒業生の思いに応えるべく普段の学校教育しっかり努めてまいりたいと考えております。皆様のご支援よろしくお願いします」とのご挨拶があり、総会の第一部は終了した。

新副支部長の中城千秋氏

新校長の橋本校長

第二部は岩井岳夫氏(27期・山形大学医学部准教授)の「男子ソフトボール部回想録」と題した特別授業が行われた。(特別授業の内容は、3～5ページに掲載してあります)

最後に、幹事の29期のメンバーのリードにより、全員で上海列車事故を悼む歌の「さよならは言わない」を歌い、第二部は終了した。

特別講演

男子ソフト部回顧録

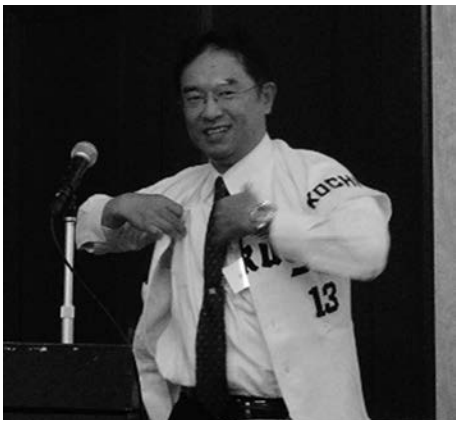
山形大学医学部准教授
岩井　岳夫　先生（27期）

1、自己紹介と小学校まで
～渡辺投手と一緒に練習も

◆自己紹介

学芸高校の、ソフトボール部時代の思い出と私の仕事の話をしてみたい。郷里、佐川の母に連絡して当時のユニフォームを探してもらうと、30年ぶりにタンスから出てきた（着用してみたが、ボタンはとまらなかった）。

私は、27期卒の1967年生まれ。母の曾祖父のいとこは、植物学者の牧野富太郎先生。地元の小学校から学芸中・高校を経て、東大、同大学院を卒業後、現在は山形大学医学部准教授を務めている。


ユニフォームを着る岩井先生

◆小学校時代

まず、小学生の頃から振り返ってみたい。兄の影響で小学校2年から野球を始めた。一緒に野球を始めた仲間で、伊野商業の渡辺智男投手（1985年春の甲子園で優勝・西武で活躍）がいた。彼は当時から、ずば抜けた素質があった。

父が教師だったので、将来自分もそうなりたいと思っていたが、漠然としたものだった。

2、学芸中学校時代
～ソフト部で投手に

◆中学時代にソフト部へ

学芸中学進学後、部活は何にしようか考え、ソフト部を選んだ。

監督は坂本和幸先生。投手が投げる球、腕をグンと回すウィンドミル投法にあこがれ、自分なりに練習した。そうしたことあって中学では投手だった。3年時に背番号1をもらったが、実質的エースは1学年下の大崎君だった。

◆西日本大会で3位に

中学3年時に西日本大会の準決勝では、私の不甲斐ない投球で敗退したが、大崎君の好投で3位決定戦を制することができた。

3、学芸高校でもソフトを
～練習して帰るだけ

◆高校時代に捕手へ

高校入学後、投手から捕手（キャッチャー）に転向。同期の津野真投手とバッテリーを組んだ。高校のソフト部では基本的に2年の夏の大会が終わったら、受験勉強のために引退していた。

◆練習、練習、そして練習

監督である宮地敬先生の練習は相当厳しかった。

学芸の敷地を回るとちょうど1キロ位になる。まずこれを走ってから練習。冬場は5周走った。

次は、キャッチボール、トスバッティング、フリーバッティング。その後投手は300球の投げ込み。野手は宮地先生が「へたくそっ」と怒鳴りながらノックをやる。これに耐えるのが大変だった。

それが終わると、1塁、2塁、3塁、本塁をぐるぐる回るベースランニング。宮地先生が止めろと言うまで走り続ける。まだ終わらない。プール横の鉄棒で懸垂を続け、その後、体操。

汽車に乗って佐川まで帰ると、一日がおしまいだった。

4、全国高校総体に出場
～有吉・野瀬選手の大活躍

◆県総体、有吉投手が好投

私が1年の時（1983年）、主力であった2年の有吉投手が大ブレイクした。5月の県総体で、6試合投げきって優勝。彼は私が高校時代に知っている投手で、ずば抜けて一番だった。

こうして夏の全国大会である全国高校総体（インターハイ）に行くことになる。このときは愛知県刈谷市で行われた。

私は記録員（スコアラー）としてベンチ入りをした。

◆全国高校総体でケガ人が

現地入り直後に、不動の5番打者の野瀬選手（2年）が左腕を骨折した。2年はこの全国高校総体で引退。彼は出場したい一心で、右打ちから左打ちの練習を始め、

会場からはどよめきや笑いが

チームメートも彼の出場を宮地先生に直訴した。すると宮地先生は「もう高知へ帰れ」と激怒。野瀬選手は欠場させられ、チームはぎくしゃくしていた。

◆まさかのタイムリー

有吉投手の好投で、決勝戦まで順当に勝ち進んだ。相手は優勝候補の群馬・新島学園。

この決勝戦で宮地先生は、骨折した野瀬選手をスタメンDH（指名打者、投手に代わって打者になる）に使う。

急遽、右打ちから左打ちになった野瀬選手が、まさかの2点タイムリー・スリーベースヒット。結局5対2で学芸高校が全国高校総体で初優勝した。まさに甲子園での優勝のような喜びだった。

5、全国高校選抜大会
～練習・練習・練習

◆有吉投手の球を受けるのは…

全国高校総体後、2年は受験のため、1年に代替わりする。私はこのときから主将を務めた。2年のうち有吉投手、安並内野手だけは3年まで続行。となると、私が有吉投手の球を受けることになる。

衝撃だった。ライズボール（ソフト特有の投手の球で、打者の直前で浮き上がるような変化球）が、目の前で消える（見失う）…

ボールを受け取ることができない。練習に練習を続けた。

◆修学旅行と日程が重なる

秋の県新人戦に勝って、1984年春の大会、全国高校選抜大会に出場することになった。

その時、宮地先生からありがたいお言葉が。「おまえら修学旅行行けんからなぁ」帰りの土讃線の車内は、ドヨーンとした雰囲気だったことを覚えている。

◆自分のミスで負けそうに

横浜で開催された全国高校選抜大会では、順当に勝ち進み、決勝戦は沖縄・前原高校。学芸は1点先制したが、相手が盗塁を仕掛けてきた。私の投げたボールがそれて、同点にされてしまう。

しかし延長戦の末、犠牲フライで全国優勝できた。自分のミスで追いつかれたので、その意味でもよく覚えている。

熱っぽく当時を振り返る

6、高校総体の連覇に向け
～県大会と「荻野目洋子？」

◆大会準決勝

今度の目標は全国高校総体の連覇だ。そのためには県大会を優勝しなければいけない。準決勝で最大のライバル、高知商業とたたかった。高知商業の投手は西村投手。彼はこの後、ソフトボール史上に残る日本屈指の大投手となった。

◆ここぞというときに…

西村投手のタイムリーで先制され、追いつけず、最終回の7回裏。2アウト2塁で、私に打者が回ってきた（会場からどよめき）。

打てるはずがない。誰もがそう思った。打ったが、ピッチャーゴロ…。しかし投手が1塁に投げる際、暴投。これで追いついた。

◆県大会優勝と荻野目洋子

その後逆転。決勝でも勝って、県大会は優勝。全国高校総体に行くことになる。

全国高校総体へ出発の前日。某氏が練習に出てこない。理由は「荻野目洋子（当時のアイドル）のコンサート見に行っちゅう」とのこと。30年後に久しぶりに飲んでそのことを突っ込むと、後で某氏から「その節は、ご迷惑をおかけしました」とメールが来た。

7、高校総体決勝戦でピンチ
～チャンスなのに打者は…

◆決勝戦まで進んだが

秋田で行われた全国高校総体。順当に進み、決勝戦は愛知・同朋高校。相手投手のホームランで1点取られた。その裏、1アウト1塁2塁で、なんと、私に打席が回ってきた。全く打てていなかったが、宮地監督は「打て！」の指示。

◆結果は？

いいところに球が来た。2ベースヒットを打ち、逆転し、優勝。正直（重圧に）ほっとしたことを覚えている。このヒットの様子は専門誌に載り、家宝にしている。

岩井選手の決定的瞬間

◆高知放送の特番

秋に奈良国体へ県代表として出ることになっていて、その前に高知放送で学芸のソフト部の活躍が「廻れウィンドミル」というドキュメンタリー番組で放映されることになった。

ディレクターから「自分の体験を日記形式で書いて」と言われ、

乱雑な字で書くと、それがそのまま放映された。宮地先生を「宮地が悪い」と記した文面が、そのままアップで使われた。

国体の県選抜チームの主将になったが、打撃はもっといい選手が選ばれ、私は守備専門。奈良国体でも優勝することができた。

◆もう少しだけ選手を続ける

全国高校総体以降、打撃が上向きとなっているのに、国体では守備専門。モヤモヤが残り、秋以降も2年生の間だけは、選手を続けた。主将は一期後の堀見和道さん（現佐川町長）に譲って外野手になった。

翌年の全国高校選抜大会にも県代表校として出場。しかし準決勝で敗退した。

３年は勉強しました

8、高校3年になったら
～勉強・勉強・勉強

◆継続は力なり

選手を引退し、3年になったらひたすら受験勉強だった。

素質がない私のような選手でも、ずっと続けきたから、なんとか役割を果たしたと思う。ソフト部や受験勉強の経験から「継続は力なり」は本当だ。

◆その後の人生で、経験が活きた

ソフト部を通じ、大舞台も何度か経験した。これは後の人生にプラスになった。チームの中で自分を活かすことの大切さを学んだ。

自分を殺せとは言わないが、適材適所、チームに穴があったら、自分から進んで埋めていく。チームを機能させていくことの大切さを学べたかと思う。

◆ソフト部で鍛えた精神力

また、厳しい練習だったから、これに耐え抜く精神力は相当鍛えられた。ソフト部の練習の方が、受験勉強よりきつかった。部活で勉強時間が削られるが、得るものは大きい。部活で鍛えられたから、受験勉強を乗りきることができた。

自分の息子はまだ小学校低学年だが、時期が来たら部活をさせたいと思う。anything can happen どんなことでも起こりえるんだ。骨折した選手がタイムリーを打ったり、打撃が苦手だった人が打てるようになったり。そんなことも学んだ。

◆東大入学後

東大入学後も、ソフト部に入ったが、監督は学芸出身、選手も学芸が多かった。

工学系を専攻し、中学時代から好きだったガンダムの影響か、核融合エネルギーにあこがれ、原子力工学科に進んだ。大学院に進んでから、軽水炉圧力容器の研究。その後東大助手として、茨城県東海村で務めていた。東日本大震災も経験した。

２０１３年からは山形大学へ移り、重粒子線がん治療施設の設置計画を進めている。

9、自分の研究を通じて
～がん治療の更なる確立を

◆重粒子線がん治療とは

重粒子線がん治療とは、炭素イオンを高速に加速して、がん細胞に照射し、死滅させる治療法だ。

がん治療は「手術での切除」「薬の投与」「放射線治療」の3つに分かれる。重粒子線がん治療は、放射線治療の中でも、最も強力だ。

利点として、高い治療効果、回数が少なくて済む、副作用が少ない、痛みが伴わない、高齢者でもできる、早期なら根治可能、などがある。世界でもこの分野では日本がリードしている。

ただ欠点として、装置が大型で高額である。縦横50メートル程度の施設が必要になる。治療費も高額。またがん患者全員に適用可能なわけではない。10人の患者さんのうち1人位の割合で適用可能だが、治療を受けた場合は大きい治療効果が期待できる。

◆東北初めての施設の完成を

この装置を東北では初めて、山形大学に設置することを目指している。施設を小さくするなど、エコ型なもので、２０１９年の治療開始に向けて頑張っている。

皆さんの周りでがんの方が将来出てくれれば、今日の話を覚えておいてくれれば、と思っている。

◆最後に

今、私がこうした仕事に携わることができるのは、本当に学芸のおかげだ。今日講演をして、改めてそう感じたところだ。学芸の関係者のみなさんにお礼を申し上げながら、講演を終わらせていただきたい。

カップを持ち宮地先生と

（追記：この講演の約半年後、ソフトボール部の顧問であった宮地敬先生が他界されました。謹んでご冥福をお祈りいたします）

（文責：29期　西　雅史）

第27回 関東支部同窓会・懇親会　写真特集

受付風景

20期生の橋本校長初登場

笑顔で、再会を喜び合って

ＣＣＢの関口さんと「ロマンティックが止まらない」を歌い、

左から関口さん、29期原さん、29期依光さん

卒業50年の
６期生をお祝いし